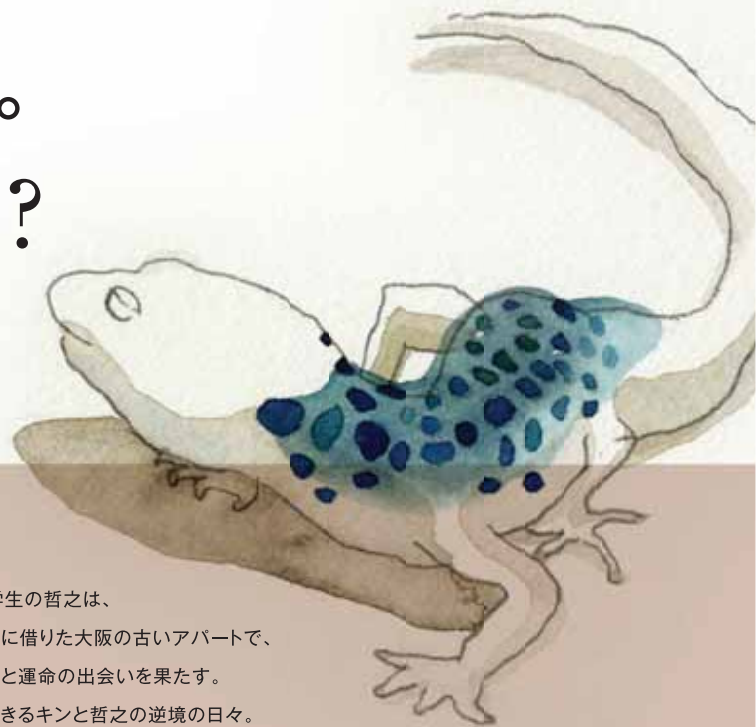


キンちゃんは、なんで蜥蜴に
生まれたんかなァ……。



俺はなんで人間に生まれたんやろ。

おい、これには何か
理由がある筈やでェ。
なァ、なんでやと思う？



1984年 文藝春秋

Story

亡き父の借財を抱えた大学生の哲之は、
借金取りから身を隠すために借りた大阪の古いアパートで、
一匹の蜥蜴(とかげ)、キンと運命の出会いを果たす。
柱に釘付けにされたまま生きるキンと哲之の逆境の日々。
恋人・陽子との爽やかな恋愛模様。
一大学生にとっては非常に重い環境の中ではあるが、
青春だからこそ、苦悩に勝る激しい情熱を感じさせる作品である。

『春の夢』『棲息』

この小説のもとのタイトルは『棲息』(せいそく)だった。『棲息』は広辞苑によると「人間や動物が生きて住んでいること」という意味を持つ。宮本輝氏が、なぜ『春の夢』というタイトルに変更したかは定かではない。しかし、この作品を読み終えたときに沸き起こる、まるで自分が夢を見ていたような不思議な気持ちを考えて、このタイトルが最終的につけられた理由を推測できそうだ。中には、哲之とキンのアパートでの暮

らしぶりからか、『棲息』の方がタイトルとしてしっくりくる、という読者もいるようだ。このふたつの言葉は、まったく意味は違うものの、この作品を表す言葉であることには変わりない。一回目は『春の夢』、二回目は『棲息』というように、自分の中でそれぞれのタイトルを定めて読み返してみても面白い。そうするとこの作品は、また違った顔を見せてくれる。

偶然は必然

もし、身の回りで起った
すべてのことに原因があったら ……
もし、偶然起ったことが、
起りまくって起ったことになったら ……

それか、たとえどんなに奇にとても、
意味があると考えたら、
乗り越えられる気がしませんか？
「よし、やってみよう」となぜか力が湧いてくるのです。

『春の夢』は、
このようなことを感じさせてくれます。